

は歯根に沿って湾曲しながらフォルクマン管内へ向い、骨髓内の骨梁と立体交叉していた。その後合流したリンパ管は下顎管内で1本の集合リンパ管となり、血管に伴行していた。以上から、組織間液などの吸収能力は歯頸部で低く、歯根1/2から根尖側で高いことが推察された。

演題3. 田野畑村における歯科保健活動の現状

— 国民健康保険保健事業を活用した

8年間の実践から—

○佐々木秀之, 米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

田野畑村では、歯科保健活動を保健活動全般の出発点ととらえ、平成元年度に健康福祉センター内に「歯科保健係」を新設し、乳幼児の齲蝕予防から高齢者の口腔ケアまで、各年代に対して様々な活動を実施してきた。現在その中でも、国民健康保険保健事業である「ヘルスパイオニアタウン事業」と「歯科保健センターによる健康管理事業」の導入が、地域住民の口腔衛生の向上に効果を上げている。

「ヘルスパイオニアタウン事業」は、平成5年度より5年間の計画で、年間約150万円の予算により、平成9年度まで実施された。本事業は、児童館児から中学3年生までの、永久歯の齲蝕予防を目的に、フッ素洗口及び、第一大臼歯に対するシーラント充填を実施するものである。事業効果として、平成10年度の小学6年生と中学1年生の一人平均DMF歯数は、平成2年度に比較して、それぞれ、5.98本から1.54本、6.28本から2.21本へと減少している。DMF者率も同様に、それぞれ、92.5%から46.2%、96.3%から69.2%へと減少している。特に平成7年度からは減少傾向が著しく、徐々に事業効果が現われてきたと考えている。

一方、「歯科保健センターによる健康管理事業」は、平成8年度より5年間の計画で、年間約500万円の予算により運用される。本事業は、在宅高齢者並びに、老人福祉施設利用者の口腔内の健全化を目的に、訪問歯科健診を中心とした口腔ケアを実施するものである。要支援、要介護高齢者の健診人数は、平成8年度244人、平成9年度210人と、着実な実績を上げてきたものの、平成12年度より施行の公的介護保険制度との関係も踏まえて、今後具体的な方法論を確立していきたいと考えている。

何れにしる、十分な予算規模を持つ、これら補助事

業の活用は、地域歯科保健活動の、ひとつの方向性と言える。

演題4. SAPHO症候群と思われる3例の臨床的検討

○中村弥栄子, 八木 正篤, 宮手 浩樹
降旗 球司, 福田 喜安, 横田 光正
工藤 啓吾, 佐藤 方信*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座, 口腔病理学講座*

下顎骨の慢性びまん性硬化性骨髓炎(DSOM)は、抗生物質の普及した今日においても治療に抵抗性を示し、長期の経過をたどる難治性疾患である。最近、骨関節の炎症性疾患と痤瘡、掌蹠膿疱症、乾癬などの皮膚疾患を特徴とする疾患(synovitis, acne, pustulosis, hyperostosis, osteitis, (SAPHO) syndrome)が報告されている。そこで、1977～1998年5月までに、われわれが経験したSAPHO症候群と思われる3例の臨床症状と治療経過について検討した。

症例は35～60歳の3例で、臨床症状は下顎の腫脹と疼痛を繰り返し、X線像では骨吸収、骨硬化を示し、ESR値は亢進した。全例とも下顎骨に加え胸鎖関節部に異常集積が認められ、掌蹠膿疱性骨関節炎がみられた。

当科では当初DSOMに対し下顎骨の搔爬、皮質骨削除、次いで下顎骨離断などを行ったが、長期経過後に再発したため、最近ではsaucerization後に腸骨海綿骨細片の移植と高圧酸素療法による顎骨保存療法を行っており、比較的経過が良好である。そこで、今回の治療は過去のDSOMに準じて行った。下顎骨の病理診断はいずれも慢性びまん性硬化性骨髓炎であった。術後3例とも下顎骨症状は軽快し、皮膚症状は1例で消退し、2例で軽快が認められたが、胸鎖関節部の症状は3例とも変化がなかった。

これらの結果から、手術の効果判定は困難であったが、下顎骨は運動性があり、日常生活に制限を受け、また何らかの菌性感染症が疑われることから手術を施行した。

従来、報告されてきた下顎の慢性びまん性下顎骨骨髓炎は全身の骨シンチグラフィを施行すると、下顎骨や胸鎖関節部に集積像が認められ、また掌蹠膿疱症がみられることから、掌蹠膿疱性骨関節炎の一部分症ではないかと考えられた。今後、さらに多くの症例について検索する必要がある。